



TITLE:

京大東アジアセンターニューズレ ター 第618号

AUTHOR(S):

京都大学経済学研究科東アジア経済研究センター

CITATION:

京都大学経済学研究科東アジア経済研究センター. 京大東アジアセン
ターニューズレター 第618号. 京大東アジアセンターニューズレター
2016, 618

ISSUE DATE:

2016-05-02

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/210497>

RIGHT:

2016 年 5 月 2 日発行 第 618 号

CONTENTS

第 17 回 アジア中古車流通研究会.....	2
「中国経済研究会」のお知らせ.....	3
読後雑感：2016 年 第 9 回.....	4
バングラデシュのラカイン族仏教徒.....	13
【中国経済最新統計】.....	20

京都大学 経済学研究科 東アジア経済研究センター (旧上海センター)
Center for East Asian Economic Studies, Graduate School of Economics, Kyoto university

Home 事業概要 組織構成 活動状況 最新情報 会員募集 お問い合わせ 検索

最新情報

- 2014.10.07 【イベント】 「中国経済研究会」のお知らせ
- 2014.09.11 【イベント】 アジア自動車シンポジウムのお知らせ
- 2014.08.12 【お知らせ】 センター協力会の解散と支援会への移行について
- 2014.07.14 【イベント】 第10回 アジア中古車流通研究会
- 2014.07.14 【イベント】 中国経済研究会 (2014年度第3回)

more

News Letter

Vol.539
2014.10.06

最新号

バックナンバー Go more

研究会 シンポジウム・講演会・セミナー 全社説明会

会員募集 寄付のお願い

アクセス | リンク集 | プライバシーポリシー | サイトマップ

Copyright (C) 京都大学経済学研究科「京大東アジア経済研究センター」, All Rights Reserved.

第 17 回 アジア中古車流通研究会

主催：京都大学東アジア経済研究センター

後援：京都大学東アジア経済研究センター支援会

2016年5月14日(土) 13時～17時

於 京都大学経済学部 みずほホール（法経東館地下1階）

報告

□岡本 勝規（富山高等専門学校国際ビジネス学科准教授）

「ヤンゴンにおける中古自動車部品・中古車市場の集積と物流」

□許 哲（ガリバーインターナショナル執行役員）

「ニュージーランドにおける中古車リテールビジネス展開について」

□塩地 洋（京都大学大学院経済学研究科教授）

「メキシコを手本に輸出重点戦略を採るモロッコ自動車産業」

研究会終了後 懇親会を行います。参加希望者は事前に御連絡ください。

なおこの研究会は京都大学東アジア経済研究センター支援会の会員のみが参加できるクローズドな研究会です。非会員で参加希望の方は塩地shioji@econ.kyoto-u.ac.jpまで、支援会入会手続をお問い合わせください。

「中国経済研究会」のお知らせ

2016年度第2回（通算第56回）の中国経済研究会は下記の要領で開催することになりましたので、ご案内いたします。大勢の方のご参加をお待ちしております。

記

時 間： 2016 年 5 月 17 日(火) 16:30－18：00

場 所： 京都大学吉田キャンパス・法経済学部東館地下1階
みずほホール AB

テーマ： 「中国の人口動態と経済成長」

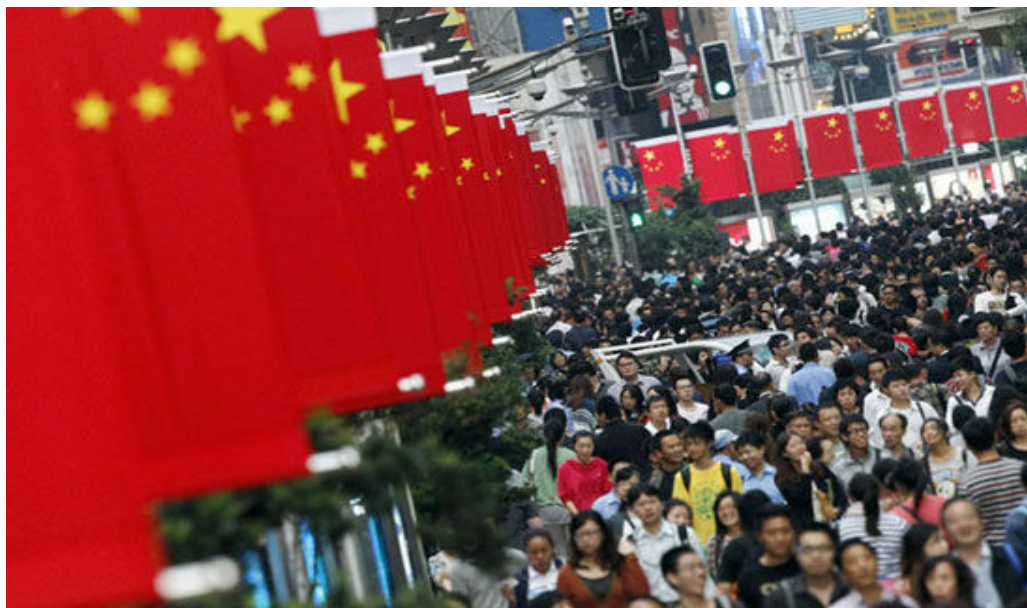
報告者： 巖 善平(同志社大学グローバルスタディーズ研究科教授)

注：本研究会は原則として授業期間中の毎月第3火曜日に行いますが、講師の都合等により変更する場合があります。2016度における開催(予定)日は以下の通りです。

前期：4月19日（火）、5月17日（火）、6月21日（火）、7月19日(火)

後期：10月18日（火）、11月15日（火）、12月20（火）、1月17日（火）

（この研究会に関するお問い合わせは劉徳強（liu@econ.kyoto-u.ac.jp）までお願いします。なお、研究会終了後、有志による懇親会が予定されています。）



読後雑感：2016 年 第 9 回

28.APR.16

アジア・アパレルものづくりネットワーク代表理事

株式会社小島衣料オーナー

東アジアセンター外部研究員

小島正憲

- | | |
|----------------------|------------------|
| 1. 「アウンサンスーチーのミャンマー」 | 2. 「未完の中国」 |
| 3. 「民主主義」 | 4. 「民主主義をどうしますか」 |
| 5. 「シニア左翼とは何か」 | |

1. 「アウンサンスーチーのミャンマー」 房広治著 木楽舎 2016 年 3 月 25 日

帯の言葉：「数奇な運命との戦いに勝利しつつあるアウンサンスーチー氏のこと、もっと知りたいと思いませんか」

房氏はオックスフォード在学中に、アウンサンスーチー氏宅に下宿していたという。房氏はその貴重な体験から、きっと本書で、スーチー氏の素顔や裏話を語ってくれていると思い、私は期待をして本書を読み進めた。しかし残念ながら、本書からは、新しい情報を得ることはできなかった。本書には、すでに語り尽くされたスーチー像以上のものは開陳されていなかった。むしろ本書の大半は、金融の専門家としての房氏の自慢話で占められており、ミャンマーのことやスーチー氏のことをもっと知りたいという人には、あまり勧めることはできない。

金融という虚業の世界で抜群の知名度を誇るという房氏は、近年、スーチー氏との縁でミャンマーに進出し、精米業と養殖業という実業の世界に踏み出したという。房氏の今後の事業展開を注視していきたいところである。ことに精米業はバゴで始めたというので、近いうちに一度見に行ってみたいと思っている。

なお房氏がよほど急いで書いたからか、編集者が怠慢だったからか、本書に挟み込まれている正誤表には 8 個所の訂正がある。その上、本文中の文章にも、稚拙でわかりにくい個所が随所にある。

2. 「未完の中国」 加々美光行著 岩波書店 2016 年 3 月 4 日

副題：「課題としての民主化」

帯の言葉：「文革・天安門事件・少数民族問題……超大国化する隣国の過ぎ去らぬ惨劇を見据え

て、見えてきた現実」

本書で加々美氏は、主に建国以後の中国知識人の発言や文献などから、「未完の中国」を俯瞰している。私はしばらく中国関係の本を読むのを自粛してきたが、副題の「課題としての民主化」という言葉に惹かれて、読んでみることにした。大著だったので、短時間で読むことはできなかったが、本書から私は、中国に関する多くの新たな知識を得ることができた。

まず加々美氏は、「毛沢東の発動した大躍進運動は延安時代の成功体験によるもの」とし、「延安は日本軍と国民党軍の二重の封鎖を受ける中で、外部からほとんど物資の輸入を絶たれて深刻なインフレと経済危機を迎えた。この決定的な危機を克服するために行われたのが、“軍民自力更生”のスローガンの下実施された“大生産運動”だったのである。一般の民衆だけでなく、幹部、軍人までもが“生産活動”に従事し、分業を越えた全民運動的な展開によって延安はわずか2年で危機を克服した」、「わずかの期間で危機を克服した“大生産運動”の成功は、のちの解放後の1958年8月から3年間続けられた“大躍進運動・人民公社・社会主義建設の総路線”の“三面紅旗”の政策の分業否定、協業推進に引き継がれた」と書いている。私は今まで、このような指摘を見聞したことがなかったので、驚いた。また私も事業において、若い人たちに「成功体験を捨てることが肝要」といつも言っているので、毛沢東の失敗の原因の一つを解明したこの指摘に、まさに「我が意を得たり」という感じがした。

さらに加々美氏は、文化大革命について、「文革は単なる奪権闘争ではなかった」とし、「“奪権運動”には常にある行動が伴っていた。一般には閲覧することもできない“人事檔案”を“檔案庫”の中から奪取し破棄することだった。そこには“階級成分”が記載されていた。これを奪い取り、また償却すること、それは非紅五類、黒五類の学生にとって悲願でもあった。これと反対に紅五類出身の学生は、“人事檔案”を死守することが目的となった。だから“人事檔案”の争奪をめぐる紅五類と黒五類の学生の間に激しい武闘が巻き起こった」と書いている。私はこの箇所を読んで、文革についての従来から持ち続けてきた疑問が氷解した。このように文革を解析すれば、紅衛兵同士のすさまじい殺戮が、すんなり理解できる。文革は若者たちの“人事檔案”の争奪戦だったのであり、つまりそれは若者たちの自らの立身出世、あるいは未来の生活をかけた戦いだったのである。そしてそこには、主義やモラルはまったくなかったのである。

次いで加々美氏は、「毛沢東の目的は明らかに毛自身の権力基盤である共産党組織を破壊し、それに応じて全国根こそぎ国民意識を変革させることにあつ

た。みずからの権力基盤の党組織を根こそぎ破壊する。それは過去のいかなる独裁者もなしえなかつたことだった。むろんスターリンもヒトラーも自己の独裁を強化するために権力基盤を強化こそすれ、破壊するなど夢にも思わなかつたろう」と書いている。文革とはこれほど異常なものだったのである。

加々美氏は、「現在の中国の国歌と社会のありようは、見ようによっては1920年代から30年代の中国に似ている。当時、国民党政権はすでに軍閥化して腐敗の度を急速に高めており、その中で民衆社会も孫文が「バラバラの砂」と形容したようにモラル的に退廃し、混乱の極にあった。そうした状況下に、1928年、共産党軍としての紅軍が“三大規律、八項注意”という、“借りたものは必ず返す”とか、“婦女子にいたずらしない”とか、極めて日常的で非政治的なモラルを、ただし厳格に守り抜く形で掲げて民衆の前に登場した時、民衆はこれに歓呼をもって応えたのである。共産党の成功はまさにこの点にあった」、「問題は、今日の中国ではかつての紅軍の役割をになう集団が容易には出現しがたいという点にある。まず、政権党である共産党自身が、かつての紅軍のような性格を帯びたモラル集団として再生することはほとんど不可能である。それは、かつての紅軍時代の共産党が政権党でなく、それゆえにモラルの実践を政治支配のキャンペーンとしてではなく、日常的な非政治的实践として行いえたことを思えばわかることである。ただ、現在の中国社会のありようは、倫理的退廃と倫理回復要求がせめぎあう形で、民衆のフラストレーションの風船玉が限界点に近いほどに膨れ上がった状態にある。そこに溜め込まれた革新へのエネルギーは、やがて自然発生的に中国に激しい変化をもたらさずにはおかない性格のものだ」と書いている。かつて私を幻滅させ中国を見限らせた主因は、中国人のモラルの崩壊であり、私はそれを「中国の変質」（2011年9月12日）と題して書いておいた。加々美氏は、私がそのとき直感的につかんでいたことを、ここで見事に論証されている。

加々美氏は、「文革を推進したすべての人が、初めからどす黒い権力欲によって運動に立ち上がったと見なすことはむろん間違いだ。多くの青年が純粋に“毛沢東思想”を信じ、その“理想”のために殉ずる想いを抱いて運動に立ち上がったのは事実である。そうした青年達も文革期のいわゆる“黒い分子”批判や実権派打倒の運動、あるいは紅衛兵同士の党派的な武闘や権力争奪戦を通じて、革命の名の下に他者の人間的尊厳を奪い、時には殺人を重ねた結果、その精神の荒廃を産み、やはりみずからの尊厳を喪失していったという現実があった」、「文革について、“自己の責任”を認める者が希有」と書いている。文革において、モラルを破壊し、両親を売り、殺人や窃盗などを繰り返した若者

たちが、それを自己批判することなく、現在、高齢者になりつつある。そしてその高齢者たちが、老人保護のモラルの欠如を叫んでいる。それは自業自得というものではないだろうか。文革の総括と自己批判なしでは、中国にはモラルの再興はないと、私は思う。

3. 「民主主義」 文部省著 西田亮介編 幻冬舎新書

副題：「《1948－53》中学・高校 社会科教科書エッセンス復刻版」

帯の言葉：「高橋源一郎さん推薦！ 圧倒された。これは、教科書以上のものであり、また“論”以上のものである」

編者の西田氏は本書を、「本書の原本である“民主主義”は、1948年から53年まで使われていた中学・高校の社会科教科書だ。まだ敗戦の記憶が新しく、GHQの統制下にあり、日本で最も多くの人々が、最も真剣に民主主義に向き合うわざるをえなかった時期に、民主主義について考える機会を持ってこなかった生徒向けに、法哲学者の尾高朝雄が中心になって編纂した」と紹介している。つまり本書は今から70年ほど前に、GHQ公認で米国直伝の民主主義についての教科書である。本書での民主主義についての解説は、現在でも充分通用するものであり、基本的なことについては網羅されており、そつなくまとめられている。

本書は民主主義の定義について、明確に示してはいないが、「すべての人間を個人として尊厳な価値を持つものとして取り扱おうとする心、それが民主主義の根本精神である」、「政治上の制度としての民主主義ももとよりたいせつであるが、それよりももっとたいせつなのは、民主主義の精神をつかむことである。なぜならば、民主主義の根本は、精神的な態度にほかならないからである。それでは、民主主義の根本精神はなんであろうか。それは、つまり、人間の尊重ということにほかならない」と書き、民主主義の基礎を思想上に定めている。

その上で、「民主主義は多数決を重んじるが、いかなる多数決の力をもってしても、言論の自由を奪うことは絶対に許さるべきではない。何事も多数決によるのが民主主義ではあるが、どんな多数決といえども、民主主義そのものを否定するような決定をする資格はない。言論の自由ということは、個人意志の尊重であり、したがって少数意見を尊重しなければならないのは、そのためである」と書いている。

「さて民主政治は、国民の福利を保障することを眼目とするものではあるが、しかし、国民の幸福や利益は、労せずして国民に与えられるべきものではなく、国民自らの努力によって築きあげられてゆくのでなければならない。“天は自

ら助くるものを助く” という。民主主義の重んずるのは、自立の精神であり、自助の態度である。すべての国民は、自らの力によって立ち、自らの手で自己の幸福を追求する権利を有する。民主主義の保障するものは、このような権利であり、このような“自由”である。ゆえに、民主主義が“国民の福利のための政治”を行うことは、かくのごとき意味での国民の基本的権利を平等に保護し、他人の自由を侵さない限度において各人の人間としての自由を確立することにはほかならない。それでは民主主義を実現するためにどうしても欠くことができない自由には、どんなものがあるであろうか。ルーゼヴェルト大統領は1941年の年頭の議会教書の中で4つの基本的な自由として言論の自由、信教の自由、恐怖からの自由および欠乏からの自由を掲げた」と書いている。ここでは民主主義と自由の関係を、「民主主義を実現するために欠くことのできない自由」と捉えている。

また労働組合の必要性に言及して、「労働の条件は、法律上は雇い主と労働者の間に取り交わされた契約に酔って自由に決められることにはなっている。しかし資本家の方は自分たちにだけ都合がよいような条件を持ち出しうるのに反して、労働者の方は、生活の必要上やむをえずそれを受諾するというふうであっては、その間に結ばれた契約は、決してほんとうに自由なものであるということとはできない。また、そういう状態をそのままにしておくことは、民主主義の原理に反する」と書いている。これなどは当時の激しい労働紛争を反映した表現であり、現在では、若干違和感を覚える。

4. 「民主主義をどうしますか」 山口二郎著 七つ森書館 2016年4月1日

帯の言葉：「“お前は人間じゃない！ たたき斬ってやる！” 民主主義の仕組みを使ってたたき斬りましょう。たたきのめしましょう」

山口氏は団塊の世代より一回り下の世代であり、団塊の世代に対して、「世代論を語ったところであまり意味はないですが、日本の場合は団塊の世代が本当にダメですね。特に大学紛争は全く無意味だったと、私は思います。何のために彼らが暴れたのか理解不能です。彼らの目標や動機で了解可能なものが今、何か残っていますか。鶴見俊輔さんたちがやったベトナムハンセン運動はよくわかります。非常に目標がはっきりしていたし、具体的にアメリカの脱走兵の手引きをした。そういう戦い方はよくわかる。ドイツやアメリカやフランスの学生運動との比較はできませんが、少なくとも日本については何だったんだろうと。むしろあの闘争があったせいで、その後の世代は政治と関わりにくくなってしまった。負の遺産の方がはるかに大きいと思います。今日の大学を取り

巻くさまざまな環境の劣化も、団塊の世代が大学をメチャクチャにしたところに原因があると思います。ある種の“反知性主義”はあそこから始まっているんじゃないでしょうか。政治家も鳩山由紀夫さん、菅直人さんたちの団塊の世代にはしっかりと政治理念を持ったリーダーがいませんでした。団塊世代が実権を取るようになったら政治も変わるだろうという期待がありましたけれど、結局、団塊世代の政治家のほとんどは単なる権力主義者でしかありませんでした」と、本書で手厳しく批判している。私は団塊の世代の一員として、この批判を真摯に受け止め、残る人生をこの汚名の返上のために捧げるつもりである。

本書のタイトルは「民主主義をどうしますか」というものであるが、内容は山口氏がこの数年、政治などについて書き続けてきたコメント類の、集録本である。その中から、民主主義に関するものをピックアップして、以下に列記しておく。

- ・権力者が至高の存在で、その行動を縛る何のルールも存在しないのが非立憲で、権力者が個人の尊厳、多様性の尊重などのルールに服従しながら権力を行使するのが立憲である。

- ・現在の日本においては、為政者が民主主義を“投票による決定者の選出”あるいは“多数決によって社会全体を拘束する規則を定めること”と、極めて形式主義的に定義し、その形式によって為政者のあらゆる欲望を正当化しようとしている。そうした形式的民主主義の絶対化は政治を破壊するのである。

- ・民主政治とは、市民の参加によって世の中の仕組みやルールを作り出す長い過程である。選挙による代表者の決定はその過程の始まりに過ぎない。代表者が何を決めるかは、選挙の際に細大漏らさず告知されているわけではないので、人々は代表者の行動に対して要求や批判を伝える必要がある。ロビイング、圧力活動、デモなどの参加は民主主義の過程を動かすための不可欠の入力である。

- ・日本が“デモのある社会”に変わったことは、日本の民主主義を、決める人を決める刹那的なものから、長い過程を包含するものに進化させている。憲法12条に言う“不断的努力”を惜しまない人々が民主主義を支えているのである。

- ・保守的な政治家やコメンテーターなどは、デモなど無意味だという批判を繰り返した。それらは民主主義を議会の中に封じ込め、民主主義における決定を多数決と同一視する、民主主義に対する日本的誤解である。民主主義は国民・市民の参加によって共同体の意思決定を行う仕組みである。自分たちの思いを政策決定に伝達する参加には、選挙以外の様々な方法がある。デモや集会もその一つである。また、選ばれた代表者が民意に沿った行動をしているかどうか、

監視することも必要となる。代表者に様々な方法で圧力をかけることは、主権者の当然の権利である。民主主義を議会の中に封じ込める議論は、国民によるコントロールを離れて勝手に行動したい代表者のわがままである。

・一言で言うなら、安保法制反対運動の中から、民主主義を支える能動的な主体がようやく日本でも出現したということである。民主主義は近代日本に西洋から移植された制度であった。実際に民主主義を担う市民をどのように作り出すかは、日本の政治学、広くは社会科学の課題であった。

・民主政治では、為政者が嘘をついたり、国民に害を及ぼす失敗を隠蔽したりすれば、国民の側が為政者を咎めるはずだという前提が存在する。

・権力を持つ政治家がテロという言葉を恣意的に使って、自由な議論と活発な議会政治を封じ込めるなら、それこそ日本の民主主義がテロに屈したことを意味する。テロとの戦いには、言論・表現の自由を実践する勇気が必要である。

・戦後 70 年、日本には一応民主主義が定着したはずである。しかし、無責任の病は深刻の度を増している。様々な失敗に目をつぶり、何も考えずに無責任な政治家を当選させるならば、国民全体も無責任と後世の人々に批判されることになる。

5. 「シニア左翼とは何か」 小林哲夫著 朝日新書 2016 年 3 月 30 日

副題：「反安保法制・反原発運動で出現」

帯の言葉：「孫を戦争に行かせたくない！ SEALDs を支えた影の主役」

本書で小林氏は、上掲著の山口氏とは違い、最近の団塊の世代の活動などを肯定的に評価している。私も本書を読んで、少し心が晴れた。小林氏は、「2015 年 8～9 月の安保関連法案めぐり国会前の主役は“シニア”だった。メディアは SEALDs やママの会を大きく取り上げたが、若い世代よりもはるかに多く集まっていたのが、実は 60 歳以上のシニアたちだった」と言い切る。そして、「かつて学生運動を経験した“全共闘世代”が集会に集まってきた。集会によっては、“にわか同窓会”の様相を呈していたものもあった。また、問題が次々に噴出するにつれ、彼らより年齢が上の“60 年安保世代”も戻ってきた」と書いている。たしかに、私の 50 年前の友人たちも国会前のデモに参加したし、辺野古で 40 年ぶりに旧友にあったという話も聞いており、それらは小林氏の説を裏付けている。

小林氏は本書で、「シニア左翼」の現況について、詳細に分析している。それを知るだけでも、体験者たちにとっては本書は格別に面白い。なお小林氏は、「あと 10 年以上、2020 年代が終わるころまではシニア左翼が減少することは

ないだろう。反対に増えると考えられる。それは次の理由からだ。今や定年をすぎても働くのが当たり前になりつつあるが、そんな彼らが会社を引退して時間に余裕ができたとき、「昔取った杵柄」で集会に繰り出してくることは十分に考えられる」、「国会前や首相官邸前でシニア世代に話を聞くと、リピーター感覚で来ている人がたくさんいた。一人でフラリとやってきて、そこで SEALDs の学生のコールに合わせて“安倍は辞めろ”と叫ぶことに感動する。学生に会いに行くため、もう一度、足を運びたくなる」といった案配だ。集会で同年代と知り合えるのも嬉しい。家では子どもや孫と安保関連法の話はできない。集会に行けば、隣にいる人にさほど抵抗なく声をかけられる。同じ志を持っているので安倍の悪口を言える。高齢者にとってストレスが発散でき、これほど爽快なことはない」と書いている。これらはシニア左翼の心情をよく表現していると思う。

小林氏は、シニア左翼には、「残りの人生をどのように全うするかを考えたとき、政治という選択肢が現れ、老後の生き方として政治に関わろうと思った人が大勢いた。シニア左翼は社会を動かそうとすることで、彼ら自身を大きく変えたと言える。安保関連法に反対するのは、戦争を起こさないためという悲愴な思いがある。あとの世代に対する自分たちの責任であるとも考えている。それがシニア左翼の生きがいとなり、それを実行するのは楽しいことでもあるのだ。シニア左翼の時代は続くであろう」と書いて、本書を終えている。私も、前にも書いたことがあるが、「若者は失うものがないから、正義のために死ぬことができる。年寄りには若者以上に失うものはない。だから若者以上に活動することができる」と考えている。小林氏の考えと予測に同感である。小林氏は、「シニア左翼は楽しく活動する」と言っているが、私はこの言葉に啓発された。小林氏によれば、安保関連法に反対するデモに対して、警察側が警戒したのは高齢者の死亡事故であるという。ハンガーストライキも行った高齢者がいたようだが、名誉ある死に場所を探している高齢者にとっては、国会前は若き頃からの願望を成就でき、しかも楽しく死ぬるチャンスを提供してくれる。国会前のハンガーストライキは、シニア左翼に、人生の最期を飾る選択肢の一つであろう。なお、現場に駆けつけた瀬戸内寂聴は、「国会前で老人が 10 人くらい死ねばよかったのよ」と過激な言葉を残したという。

なお小林氏は、「新左翼党派や過激派のシニア左翼たちで構成されている。彼らの多くは、自分たちの過去の運動について口をつぐんですべてを墓場まで持っていこうとしている。内ゲバという負の遺産を含めた社会運動の歴史が、詳らかにされないまま終わってしまいそうなのだ。これでいいのだろうか。無

責任と言わざるを得ない」と厳しく指弾するのも忘れてはいない。この指摘も正しい。私はたまたま非暴力を方針に掲げた組織に属していたが、内ゲバを含む暴力を肯定する組織に入っていた可能性も否定できない。シニア左翼全体として、このことについてはしっかりした総括をしておかねばならないと思う。

また小林氏は、「2015年9月、新左翼党派も国会周辺に集まり、安保関連法案反対を叫んでいた。もっとも党派名を掲げていないところもあり、気づかなかった人も多かっただろう。だが、警察の公安担当刑事はしっかり彼らを見きわめていた。誰があたりに陣取っているか、動員数はどのくらいか、不穏な動きがないかなどを監視するためだ」、「日本共産党が日本最大のシニア左翼集団であることは間違いない。新左翼党派とは三桁ちがう」と書き加えている。

以上

バングラデシュのラカイン族仏教徒

2. MAY.16

アジア・アパレルものづくりネットワーク代表理事

株式会社小島衣料オーナー

東アジアセンター外部研究員

小島正憲

私のバングラデシュの友人が、バングラデシュ南端のクアカタで、「Alo Aro Alo Foundation（光をもっと光を基金）」を作り、活動を始めた。友人は私に、その組織の目的が、「クアカタ周辺のラカイン族仏教徒の生活支援」であると、説明してくれた。私は仏教徒がミャンマーとの国境沿いのラムやコックスバザールに住んでいるのは知っていたが、遠く海を隔てたクアカタ周辺にも居住しているということは知らなかった。



た。しかも彼らはラカイン族としての習慣を保持しながら、その地でヒンドゥー教徒やイスラム教徒とうまく共存しているという。昨今、ロヒンギャ問題を巡って、ミャンマーでは過激派仏教徒のイスラム教徒襲撃事件が度重なっており、アウンサンスーチー氏も対応に苦慮している。またバングラデシュでは2012年にラム市で過激派イスラム教徒の大規模な仏教寺院焼き討ち、仏教徒襲撃事件が起きた。バングラデシュ内のイスラム過激派は、仏教徒襲撃などを利用し政権転覆を狙っていた。両国におけるそのような現況の中で、クアカタではイスラム教徒と仏教徒が仲良く暮らしているという。私はその情報の真偽と、彼らの現状をこの目で確かめたいと思い、友人に案内してもらい、クアカタに足を運んだ。

※以下の過去の私の小論を参照していただきたい。

- ・「バングラデシュから見たロヒンギャ族問題」
- ・「ラム市でのイスラム教徒の仏教徒襲撃の真相」
- ・「アルカイダ、ジャマティ・イスラミ、969運動」
- ・「ロヒンギャ問題の解決策」

クアカタへは、ビジネスマンなどは、まずダッカからポリシャルへ飛行機で40分ほど飛び、そこから車で約3時間走るというコースを取る。ただしこのフライトは週3便しかなく、今回、私はスケジュールが合わなかったので、ダッカから船でポリシャルまで川を6時間下るというコースを取った。この船は一般のバングラデシュ人の重要な足となっており、3等船室では汚いシートの上で多くの人が、大量の雑多な荷物といっしょに雑魚寝しており、その雑然かつ混沌とした船内の状況は、私にバングラデシュそのものを感じさせた。船外に目を転じてみても、船は一貫して泥川を下るのみで、そこから情緒を感じることはまったくなかった。私たちはクーラーの効いた1等船室（約1400円）で、ゆったりと座り、雑談をしたり本を読んだりしていたので、時間をもてあますことはなかった。ただし帰路は深夜便で、川を上ったので9時間ほどかかった。特等寝室（約8500円）を用意してもらったので、私はずっと寝ていた。ポリシャルからクアカタまでの道路は往復2車線、簡易アスファルト舗装で悪くはなかった。

クアカタに住んでいるラカイン族については、まだ学術的な研究は行われておらず、その歴史は詳らかではないが、私が現地で聞きかじったところによると、下記のようなものである。ラカイン族は、紀元前、ミャンマーのアラカン山脈の西部からベンガル一帯に住んでいたという。そこには釈迦の初期仏教が直接伝えられたようである。ちなみにバングラデシュの西方のパハルプールは、8世紀初めアジアにおける仏教の中心として栄えた。今、この地に残る巨大僧院跡は世界遺産に登録されている。その後、初期仏教はヒンドゥー教やイスラム教に押され、姿を消した。約1000年後、ミャンマー西部にアラカン王国が勃興し、ベンガル一帯にまで勢力を伸ばしたが、その後、1600年代後半にベンガル一帯がムガル帝国に、1700年代後半にミャンマーのラカイン一帯がビルマ王国に侵略され、ラカイン族は大きく二つに分断された。その後、ベンガル一帯に住んでいたラカイン族仏教徒はヒンドゥー教徒やイスラム教徒の浸出により、その地で少数派に追いやられた。それでもラカイン族はアラカン王国時代から続くミャンマー経由の上座部仏教を信仰し続けた。

クアカタ周辺には、現在、仏教徒約3万5千人が住んでいる。クアカタ周辺の人口は約30万人と言われており、仏教徒は12%弱と見られている。なおクアカタとい



う地名は、「クア（井戸）を（カタ）掘る」というところから来ていると言われており、そこからは、ラカイン族が先住民として、この地を開墾し定着するため、懸命に努力したことがうかがわれる。ラカイン族の顔つきや体型は、明らかにベンガル人とは違い、東洋人そのものである。なによりも、ラカイン族女性の多くが、ミャンマー女性と同じく、顔を白く塗る「タナカ」という化粧を施しており、ミャンマー人の伝統衣装であるロンジー（巻きスカート）を穿いていることから、ベンガル人とはまったく違う風習を守って、生活していることがよくわかる。

クアカタ周辺には仏教寺院が 60 箇所あると言われており、平均すると 600 人（50～60 家族）に 1 寺院の割で存在していることになる。残念ながら今回は入手できなかったが、その所在地を表す地図も作成されているという。手当たり次第に、寺院を訪ねたみたところ、敷地内に立派なパゴダを持っている寺院から、大仏を本尊にしている寺院、粗末な家の中に小さな仏像が飾られているだけの寺院まで、いろいろであった。ただし約 5 年前、私がラム市で見た寺院と比べると、この地の寺院は新しく、規模も小さいように感じた。寺宝の類いも金製品が少なく、それはこの地のラカイン族の生活水準をうかがわせるものだった。



私は、「にわかブuddhist」に変身して、それらの寺院を拝んで回った。すべての寺院がミャンマー式で、門の入り口から裸足にならなければならな



った。またすべての寺院の僧侶がヤンゴンかマンダレーで修業を終えていると言っておられた。上座部仏教の教義では僧侶は働いてはならず、もちろんこの地でも僧侶の生活はすべて信者である近隣住民の喜捨で成り立っている。僧侶は信者の日常の苦悩や死への恐怖をやわらげる信仰の対象として、その尊厳を保っているようだった。



ラカイン族の一般家庭の家は意外に立派であり、そのほとんどがトタン屋根であり、草葺きや竹製ではなかった。なかにはレンガ作りのしっかりした建物もあった。ほとんどの家が高床式になっており、階下には簡単な農機具やバイク、自転車などが置かれていた。特筆すべき

は、多くの家の階下に、簡単な織機が置いており、ラカイン族女性がそこで機織りの内職をしていたことである。「Alo Aro Alo Foundation (光をもっと光を基金)」の事業の一つは、この女性たちが織った布の販売を手伝うことだという。私は販売センターでこれらの布を見せられ、意見を求められたが、かなり品質が劣り、すぐにはよいアイデアが浮かばなかった。男性は主に農業に従事しているようだ。クアカタは海に近いが、漁業はイスラム教徒が主に行っているという。ラカイン族の村内を視察中に、ちょうど昼時になったので、ラカイン族の一般家庭で食事をご馳走になった。料理はバングラデシュ風であったが、ベンガル人は食べないという貝料理なども出てきた。



昼食後、「Alo Aro Alo Foundation (光をもっと光を基金)」の代表である友人が私に、「クアカタの地で、この地の女性の生活向上のために、縫製工場を稼働させて欲しい」と頼んできた。私はそのような依頼が来ると予測していたので、「代表の気持ちはよくわ



かりますが、この地にはサイクロンがよく襲います。とても天災には勝てませんので、考えさせてください」とやんわりと断った。すると友人はすぐに、「サイクロン対策としては、シェルターが完備されているので問題はない」と答えた。そこで私はそのシェルターとやらを見ておくのも勉強になると思い、それを見に行ったところ、彼らがシェルターと呼ぶものは、学校などに使用されて

いる鉄筋入りレンガ作り建物であった。建物は頑丈そうで、サイクロンにも耐えられそうであり、それはほぼ各村に一個所設置されているという。私の事前調査では、ベンガル地方におけるサイクロンは、4～5月、9～12月の年2回襲ってくるということで、ことに11月はひどいという。しかもほぼ3年周期で大災害をもたらしており、2007年11月のサイクロン被害は、死者4000人超、被災者約900万人に及んだという。「残念ながら、この巨大なサイクロンにシェルターだけでは、とても勝てない」と私は思ったので、以後、縫製工場建設の話をできるだけ避けるようにした。

それでも友人は私に、「クアカタの土地は1エーカー＝300万タカ（約430万円）。ワーカーの月給は4000タカ（約5800円：ダッカ周辺の半分以下）。建設中のパドマ橋が完成すればダッカから車で6～8時間。チッタゴンへの船便もあり輸出入にはダッカ



より便利。電気も火力発電所ができれば万全」などと、話し続けた。それに対し私は、「サイクロンの暴風雨や高波対策にカネがかかり、とても縫製工場の経営は難しいだろう」と、明確に答えたので、二人の間にしばらく気まずい空気が流れた。

しかし私にとっては、このシェルター視察は、大きな意味があった。その小学校の校庭で遊んでいた子どもたちが、私の周囲にむらがってきたので、その子たちの顔を見回すと、その中には明らかにラカイン族の子どもや、イスラム教徒の子どもがいたからである。また友人がこの子はヒンドゥー教徒の子どもだと頭を指して教えてくれたが、その判別はできなかった。つまりこの小学校では、仏教徒・イスラム教徒・ヒンドゥー教徒の子どもたちが、いっしょになって一つの部屋で学



んでいるということであり、この村にはその親である仏教徒・イスラム教徒・ヒンドゥー教徒が仲良く、いっしょになって住んでいるということである。私が友人にそれを確認すると、友人は頷きながら、この村には仏教寺院、モスク、

ヒンドゥー教寺院が、それぞれ建っていると説明してくれた。

友人はクアカタ周辺の観光地としての可能性にも注目しており、浜辺やマングローブ林などを案内してくれた。彼はクアカタを、バングラデシュで海の観光地として名高いコックスバザールのように、開発したいと望んでいた。私はコックスバザールに行ったことがあるが、そこは決して綺麗な浜辺とは言えず、綺麗な海岸を知らないバングラデシュ人ならば観光に訪れるだろうが、多くの外国人が押し寄せるような場所ではないと思っている。クアカタも同様に、海は泥で濁っており、とてもサンライズとサンセットだけでは、外国からの観光客の誘致は無理だと思った。

あまり興味を示さない私に、友人はこの近くに中国と韓国の共同による火力発電所の建設が開始されており、しかもその側に深海港と工業団地の建設が計画されているので、そこに案内するという。私は友人に連れられて、クアカタからポリシャルの方へ 40 分ほど車で戻り、海に近い河岸に行き、そこから木造船に乗った。河口を海に向かって 40 分ほど下ると、川岸に 10 艘あまりの船が横付けされており、そこからパイプが陸地に向かって伸びていた。川の中程で泥を浚渫し、陸地を埋め立て、そこに火力発電所や深海港、工業団地を建設するのだという。その様子だけでは、その真偽のほどを判断するのは難しかった。それでもなにかの大型プロジェクトが進行中であることは確認できた。

今回のクアカタの地の訪問は、私の死生観に、新たな視点を付け加えるよいきっかけとなった。

私は日本の高齢者の「終の棲家、つまり死に場所」の条件を、今のところ次の様に考えている。私はこれらの視点で

今後も、「死に場所探し行脚」を続けようと考えている。

- ①その地の生活費が安いこと（老後破産を防ぐため）
- ②その地に医者がないこと（ムダな延命治療を避けるため）
- ③親族がすぐに駆けつけることができない遠方の地であること（身内の誰にも世話をかけずに、静かに死ねるから）
- ④死んだ後の処理が希望通りに行えること（日本では葬送の自由が確保されていないから）
- ⑤楽しくしねる場所であること
- ⑥死そのものが社会的価値を持つこと

これらの条件に照らし合わせると、クアカタを死に場所として選定した場合、以下のようなことになる。

- ① 付きも日本人が違和感を覚えない仏教徒の女性がたくさんいるため、安価な介護人材が豊富に存在しており、老後破産状態は防げる。
- ② 代的な医療施設もなく、医者もいないので、ムダな延命治療を施されることはないので、日本の高齢者の医療費のムダ使いもなくなる。
- ③ 本からは遠方であり、この地を訪れるには時間も費用もかかるので、あまり親交のない親族は訪問を諦めてしまだろう。この地なら親族をバタバタさせず、迷惑を掛けずに死ねる。
- ④ アカタでは土葬・火葬・自然葬などが行われており、望めば水葬も可能なようである。葬送の自由は確保されている。僧侶もいるので、読経も可能である。
- ⑤ だしクアカタの情景は、感動的ではなく、私を含めた日本人は、そこで死にたいとは思わないだろうし、楽しく死ねる場所でもない。
- ⑥ アカタで死んでも、それに大きな社会的価値はないだろう。ただし大量の日本人高齢者がこの地を死に場所として選び移住してきた場合、その経済効果は大きい。



《裕福なラカイン族の土葬墓》

以上

【中国経済最新統計】

	① 実 質 GDP 増加率 (%)	② 工 業 付 加 価 値 増加率 (%)	③ 消費財 小売総 額増加 率(%)	④ 消費者 物価指 数上昇 率(%)	⑤ 都 市 固 定 資 産 投 資 増 加 率 (%)	⑥ 貿 易 収 支 (億 ^F 元)	⑦ 輸 出 増加率 (%)	⑧ 輸 入 増加率 (%)	⑨ 外国直 接投資 件数の 増加率 (%)	⑩ 外国直 接投資 金額増 加率 (%)	⑪ 貨幣供 給量増 加 率 M2(%)	⑫ 人民元 貸出残 高増加 率(%)
2005 年	10.4		12.9	1.8	27.2	1020	28.4	17.6	0.8	▲0.5	17.6	9.3
2006 年	11.6		13.7	1.5	24.3	1775	27.2	19.9	▲5.7	4.5	15.7	15.7
2007 年	13.0	18.5	16.8	4.8	25.8	2618	25.7	20.8	▲8.7	18.7	16.7	16.1
2008 年	9.0	12.9	21.6	5.9	26.1	2955	17.2	18.5	▲27.4	23.6	17.8	15.9
2009 年	9.1	11.0	15.5	▲0.7	31.0	1961	▲15.9	▲11.3	▲14.9	▲16.9	27.6	31.7
2010 年	10.3	15.7	18.4	3.3	24.5	1831	31.3	38.7	16.9	17.4	19.7	19.8
2011 年	9.2	13.9	17.1	5.4	24.0	1549	20.3	24.9	1.1	9.7	13.6	14.3
2012 年	7.7	10.0	14.3	2.7	20.7	2303	7.9	4.3	▲10.1	▲3.7	13.8	15.0
2013 年	7.7	9.7	11.4	2.6	19.4	2590	7.8	7.2	▲8.6	5.3	13.6	14.1
2014 年	7.4	8.3	12.0	2.0	15.2	3824	6.1	0.4	4.41	14.2	12.2	13.6
1 月				2.5	19.8	319	10.5	10.8	-8.6	-4.5	13.2	14.3
2 月				2.0		-230	-18.1	10.4	1.3	4.0	13.3	14.2
3 月	7.4	8.8	12.2	2.4	17.3	77	-6.6	-11.3	6.1	-1.5	12.1	13.9
4 月		8.7	11.9	1.8	16.6	185	0.8	0.7	0.5	3.4	13.2	13.7
5 月		8.8	12.5	2.5	16.9	359	7.0	-1.7	8.4	-6.6	13.4	13.9
6 月	7.5	9.2	12.4	2.3	17.9	316	7.2	5.5	10.3	0.2	14.7	14.0
7 月		9.0	12.2	2.3	15.6	473	14.5	-1.5	14.0	-17.0	13.5	13.4
8 月		6.9	11.9	2.0	13.3	498	9.4	-2.1	5.2	-14.0	12.8	13.3
9 月	7.3	8.0	11.6	1.6	11.5	310	15.1	7.2	9.4	1.9	11.6	13.2
10 月		7.7	11.5	1.6	13.9	454	11.6	4.6	8.7	1.3	12.1	13.2
11 月		7.2	11.7	1.4	13.4	545	4.7	-6.7	-8.6	22.2	12.0	13.4
12 月	7.3	7.9	11.9	1.5	12.6	496	9.5	-2.3	6.1	10.3	11.0	13.6
2015 年	6.9	5.9	10.7	1.4	9.7	6024	-9.8	-14.4	11.0	0.8	11.9	15.0
1 月				0.8		600	-3.3	-20.0	2.2	-1.1	10.6	14.3
2 月				1.4		606	48.3	-20.8	49.8	0.1	11.1	14.7
3 月	7.0	5.6	10.2	1.4	13.1	31	-15.0	-12.9	0.3	1.3	9.9	14.7
4 月		5.9	10.0	1.5	9.6	341	-6.5	-16.4	2.9	10.2	9.6	14.4
5 月		6.1	10.1	1.2	9.9	595	-2.4	-17.7	-14.0	8.1	10.6	14.3
6 月	7.0	6.8	10.6	1.4	11.6	465	2.8	-6.3	4.6	1.1	10.2	14.4
7 月		6.0	10.5	1.6	9.9	430	-8.4	-8.2	9.6	5.2	13.3	15.7
8 月		6.1	10.8	2.0	9.1	602	-5.6	-13.9	23.9	20.9	13.3	15.7
9 月	6.9	5.7	10.9	1.6	6.8	603	-3.8	-20.5	5.2	6.1	13.1	15.8
10 月		5.6	11.0	1.3	9.3	616	-7.0	-19.0	2.5	2.9	13.5	15.6
11 月		6.2	11.2	1.5	10.8	541	-7.2	-9.2	27.7	0.0	13.7	15.3
12 月	6.8	5.9	11.1	1.6	6.8	594	-1.7	-7.6	17.2	-45.1	13.3	15.0
2016 年												
1 月			10.3	1.8	18.0	633	-11.5	-18.8	14.1	-2.1	14.0	15.2
2 月			10.2	2.3		326	-25.4	-13.8	-11.3	-1.3	13.3	14.7
3 月	6.7	6.8	10.5	2.3	11.2	299	11.2	-7.4	26.1	4.0	13.4	14.7

注：1. ①「実質 GDP 増加率」は前年同期（四半期）比、その他の増加率はいずれも前年同月比である。

2. 中国では、旧正月休みは年によって月が変わるため、1 月と 2 月の前年同月比は比較できない場合があるので注意されたい。また、（ ）内の数字は 1 月から当該月までの合計の前年同期に対する増加率を示している。

3. ③「消費財小売総額」は中国における「社会消費財小売総額」、④「消費者物価指数」は「住民消費価格指数」に対応している。⑤「都市固定資産投資」は全国総投資額の 86%（2007 年）を占めている。⑥—⑧はいずれもモノの貿易である。⑨と⑩は実施ベースである。

出所：①—⑤は国家统计局統計、⑥⑦⑧は海関統計、⑨⑩は商務部統計、⑪⑫は中国人民銀行統計による。

。